

野火的活動が拡がる条件の試論的分類 — エンゲストロームの文献とエスノグラフィーを通じた考察から — An Exploratory Classification of the Conditions for the Spread of Wildfire Activities - From the Literature of Engeström and Consideration Through Ethnography -

渡辺 謙仁[†], 田邊 鉄[‡]
Takahito Watanabe, Tetsu Tanabe

[†]放送大学, [‡]北海道大学
The Open University of Japan, Hokkaido University
ken.ini38@gmail.com

概要

本稿の著者でもある渡辺と田邊[1]は、エンゲストロームが提唱した「野火的活動」[2]が一時的に燃え拡がる条件の例を示した。そこで本稿では、[1]と[2]を読み解き、他にも野火的活動が拡がる条件がないか考察し、今後の野火的活動の分析の便益のために、それらの条件の分類を試みた。野火的活動は、(1) 市場化できるかどうかも含めて様々な実験が行われている段階に活動がある場合、(2) 市場規模が小さすぎ、営利企業にとって、大規模資本を投入して様々なサービスを提供し、完全に市場化する旨味がない場合、(3) 倫理的問題や権力関係から、健全で安定した市場を作れない場合、(4) 中央集権的な活動がそもそも不可能な場合の4条件のいずれか一つ以上が成立する場合に燃え拡がるだろう。

キーワード：趣味縁 (avocational connection), 活動理論 (activity theory), 野火的活動 (wildfire activities), ハイブリッド・エスノグラフィー (hybrid ethnography)

1. はじめに

「活動理論」[3]とは、学校や職場などをフィールドとしてきた、活動の文化歴史性を重視し、社会文化的アプローチを取る、集合的認知研究の潮流の一つである。現代における代表的な活動理論家であるエンゲストロームが提唱した「野火的活動」[2]とは、野火のように拡がる活動のことである。境界の曖昧性、流動性、集散性などを特徴とする。野火的活動は、野火のように、自然発生的にあちこちで同時発生的に始まる。飛び火したり、別の場所での活動とつながって、一気に燃え拡がったりしたかと思えば、突然勢いが弱まり、活動が終わってしまったように見えることもある。しばらく時間が経ち、再び活動の勢いが増すこともある。野火的活動は、長い時間的スケールで見れば長寿命であり、なかなか野火が燃え尽きにくくすぶり続けるように、完全に途絶えることはないが、短い時間的スケ-

ールで見れば、野火が同じ勢いで燃え続けることができないように、持続的でない。



図 衛星の実物大模型の例 (2015年3月22日に、趣味的なものづくりの展示会「NT 京都 2015」で展示。第一著者撮影)

2. 先行研究とその問題点

本稿の著者でもある渡辺と田邊[1]は、趣味として、初音ミクというキャラクターを乗せて、宇宙空間でネギを振らせる超小型衛星(図)を開発する、「ソーシャルメディア衛星開発プロジェクト SOMESAT」(Social Media SATellite development project. 以下、SOMESAT)という、特に活動初期は野火的活動として捉えられた活動において、いかにして活動の境界が構成され、まだ横断されたかを、エスノグラフィックに明らかにした。活動の対象を生み出すツールや集合的活動が向かう対象の特質、身体的移動などが、活動とその境界のあり方に関わっていた。SOMESATはその時々までの歴史性に埋め込まれながら、次第にプロジェクトとして活動の境界を構成する反面、野火性を失って、ある

いは捨てていった。野火的活動はエンゲストローム[2]が指摘しているように、長い時間的スケールで見れば長寿命であり、完全に途絶えることはないが、短い時間的スケールで見れば持続的でないとと言える。渡辺と田邊[1]の成果は、野火的活動において境界が構成され、野火性が失われるメカニズムを明らかにしたものであるが、裏返せば、野火的活動が一時的に燃え広がる条件の例を示したものとと言える。しかし一例にとどまり、他にも野火的活動が広がる条件がないかは検討されていない。

3. 目的と方法

そこで本稿では、様々な活動を野火的活動として捉えやすくし、エスノグラフィーや会話分析を改良した、活動理論の方法で研究できるようにするために、エンゲストローム[2]と渡辺と田邊[1]を読み解き、他にも野火的活動が広がる条件がないか考察し、それらの条件の分類を試みる。

4. 結果

野火的活動は、以下の条件のいずれか一つ以上が成立する場合に燃え広がるだろう。なお、条件1は主に本稿の著者でもある渡辺と田邊[1]が自ら行ったエスノグラフィーを通じた考察から導き出されたものである。一方、条件2から4は、エンゲストローム[2]の文献を読み解いて導き出されたもので、条件を提示する順序には、大きな意味はない。

(1) エンゲストロームは、野火的活動は完全な市場化に抵抗すると述べているが[2]、市場化できるかどうかも含めて様々な実験が行われている段階に活動がある場合、SOMESATを生み出した「菌根」[2]であり、様々なタイプの動画が営利を目的としないユーザーによって「N次創作」[4]的に生み出されていた、かつてのニコニコ動画等の動画投稿サイトが、この場合に相当するだろう。動画投稿サイトのユーザーたちは、動画投稿サイトで一体何ができるのかを、実験的に模索していた。SOMESATの野火性が失われたことは、企業やいわゆる YouTuber 等の、営利を目的としたユーザーによる市場化のための知識蓄積とマーケティングの最適化が進み、動画投稿サイトが市場化されて、N次創作が縮小したことと関係があるかもしれない。

(2) 市場規模が小さすぎ、営利企業にとって、大規模資本を投入して様々なサービスを提供し、完全に市場

化する旨味がない場合、エンゲストロームが野火的活動の例として挙げている「バードウォッチング」[2]や、バードウォッチング同様、職業研究者とアマチュアファンの「ハイブリッドなコミュニティ」[2]によって担われている市民科学である天体観測が、この場合に相当する。バードウォッチングや天体観測では、企業によって双眼鏡や望遠鏡、カメラ等が販売されているが、鳥や天体の観測ツアーなどが大規模に展開され、一般消費者の人気観光アクティビティとして定着するような、完全な市場化には至っていない。

(3) 倫理的な問題や権力関係から、健全で安定した市場を作れない場合、企業から商品は販売されているが、住民や行政、警察などとしばしば対立する「スケートボード」[2]や、固定的なメンバーによる中央集権的な犯罪組織である暴力団と違い、固定的な集団やリーダーが存在せず、犯罪事件や犯罪に限りなく近い案件ごとに、警察や暴力団などの権力関係の隙を突く形で、メンバーが流動的に離合集散を繰り返す活動形態になっている「半グレ」が、この場合に相当する。

(4) 中央集権的な活動がそもそも不可能な場合。「災害救援」[2]などが、この場合に相当する。災害救援の現場ではしばしば、救援者は災害救援本部などの中央集権的な指揮命令系統に期待できず、自律的に情報を得て、他者とのアドホックなつながりである「ノット」[5]を流動的かつしなやかに結んだり開いたりしながら、救援活動を展開しなければならない。

5. まとめ

本稿により、野火的活動が広がる条件の試論的分類ができ、様々な活動を野火的活動として捉えやすくなったであろう。今後は、著者自身が、これらの条件の妥当性を、エスノグラフィーや会話分析を改良した、活動理論の方法で実証的に検証していきたい。本稿の読者にもまた、様々な集合的活動を対象として、検証してもらいたい。その際、野火的活動が広がる条件は、本稿で抽出できたものが全てではないことに注意されたい。社会文化は常に移ろいゆくし、そもそも野火的活動とは、固定的なうつつに収まるようなものではなく、網羅的に全ての条件を抽出・分類することなどできないだろう。

文献

[1] 渡辺謙仁・田邊鉄, (2018) “コミュニティの境界はいかに

して構成・横断されるのか：超小型衛星開発プロジェクトのエスノグラフィーを通じた活動理論的考察,” 日本認知科学会第35回大会発表論文集, pp. 817-824.

- [2] エンゲストローム, Y., (2009) “Wildfire activities: New patterns of mobility and learning,” *International Journal of Mobile and Blended Learning*, Vol. 1, No. 2, pp. 1-18.
- [3] エンゲストローム Y., (1999) “拡張による学習：活動理論からのアプローチ,” 東京: 新曜社.
- [4] 濱野智史, (2008) “アーキテクチャの生態系：情報環境はいかに設計されてきたか,” 東京: NTT 出版.
- [5] エンゲストローム Y., (2013) “ネットワークする活動理論：チームから結び目へ,” 東京: 新曜社.